

膨張する事物と侵食される人間たち

——ヘルタ・ミュラー『キツネはそのころもう猟師だった』について——

鳥山 明日香

ヘルタ・ミュラー（一九五三—）は、かつて多くのドイツ人が入植し、今もドイツ系民族が集住するルーマニア領バナト地方で生まれ育った作家である。ミュラーがこれまで発表した作品の多くは、閉鎖的な村での幼少時代やルーマニア国家への協力を断ったことによる嫌がらせや脅迫、審問、そしてチャウシェスク政権崩壊後のドイツへの移住などといった自らの経験を素材としたものであり、本論で扱う『キツネはそのころもう猟師だった』も、独裁政権末期から崩壊までの時期を舞台に、監視や裏切りの恐怖と、市民の荒んだ生活を描いている。こうした不当に抑圧され恐怖に苛まれる異常な状態が、ごく当たり前の姿であるかのように市民たちの日常風景の一部として描写されているという点に、ミュラーの特徴を見出すことができるだろう。しかしながら、全体主義国家の下での異常性は日常に完全に溶け込みきってはならず、テキストに潜んだ違和感を拭い去ることはできない。そして、人間が人間らしい扱いを受けていないという事実に対応しその役割が重要になる存在として、事物を挙げるができる。なぜなら人間は、事物との関係性における地位が揺らぐことよって弱々しい存在になっていくからだ。したがって本論では、日常生活で人間を取り巻いている事物に注目し、追い詰められる人間たちの状況がどのように表現されているのかを分析する。

第一章では、事物と人間の関係性を論じている。この小説では「まるで」のようだ」「のよう」にみえる」といった直喩を通して、事物と人間が一文の中で直接結びつけられる箇所が多い。人間の一部を道具に例え、また事物を人間の姿に当てはめるといったコラーージュのような結合によつて、事物は人間化し人間は事物化するという状況が作りだされている。さらに、同時に多用されている暗喩表現によつて事物は別の物体や生命体「である」と断言される。このように人間が事物に、事物が人間になることによつて、人間と事物の間の明白であつた力関係は揺らぎ、人間の地位が貶められることになる。

一方で、本來的な存在でないはずの事物が擬人化技法を使つて描写されることによつて、事物はその可動域を広げ始める。事物の中でも特に目立っているのは、衣服や靴などの服飾品である。ロラン・バルトは制服について「この夢想のなかでは結局衣服が完全に人間を吸収してしまふ。労働者は解剖学的にその道具に似せられているので、ここに詩的に描かれているのは、ゆきつくところ人間の疎外である。」と述べているように、服飾品は人間の空洞化を示す最も効果的な存在である。これらの表現は、描写の方法としてごく素朴なものであり、またミュラーの文章自体も一文が短く、平易な文体が用いられている。この一見幼稚ともとれる文体で、事物と人間の組み合わせという異種間のグロテスクな結合がこの文体で描写されること、そして日々の出来事の背後に、独裁者、監視、検閲、軍、飢餓という用語が潜んでいることという、二つのアンバランスさが異様な空気と不快感を生みだしている。

さらに、物語に登場する事物として象徴的な役割を果たすのが、主人公アディーナが大切にしているキツネの敷物だ。このキツネは、彼女の部屋に侵入する秘密警察の男に少しずつ四肢を切り取られてゆく。これによつて、キツネは侵入されたという事実を彼女に指し示す存在として、ア

ディーナに恐怖を与える対象に変貌する。いつも恐怖に怯えるアディーナが唯一安心できるはずの自宅が危険な場所と化するのは、彼女の仲間であるはずのキツネの敷物が侵入者を見過したとして信頼できる対象でなくなってしまうからであり、こうしてキツネは事物と人間の特別な関係を体現するのである。しかし、人間の領域を侵食してきた事物が、ただ強靱な力を手にしていつも猛威を奮っているわけではない。人間の事物化と事物の人間化は表裏一体の現象であり、人間化した事物というのは、事物化する恐怖に怯える人間と同じ土俵に立っていると考えることもできる。人間化することで、本来人間だけが苛まれていた不安と恐怖に事物も巻き込まれることになるのだ。『キツネはそのころもう猟師だった』というタイトルは、体制派と反体制派の関係が政権崩壊後に逆転し、今まで獲物として虐げられてきた反体制派が今度は猟師として、体制派を追い詰めるという様子を自嘲的に指し示しめすものであるが、人間と同じように事物もまた、この構図に絡め取られているのである。

第二章では、事物と言葉の関係性に注目する。ミュラーの事物に関する描写には、増殖というイメージと強く結びついた表現がある。独裁者の目を思わせる「輝く」ものは、黒光りする革靴、コートの釦、スプーンにまで拡大・増殖していき、この増殖のイメージは、「育つもの」への恐怖へ繋がっていく。この物語では、成長して伸びるもの、すなわち毛や爪に対する恐怖が何度も言及されている。小説に挿入されるエピソードでは、髪が伸びる程死に近づき、服を作り余りの端切れが増えるほど死に近づく人々のイメージが描き出されるが、これは人間の生きる長さを決定する尺度が初めから設けられていて、人間はそれに抗うことができないことを指し示している。尺度という概念は、物語の舞台やミュラーの母がソ連による強制労働の被害にあっていることを念頭に入れれば、収容所生活や全体主義体制下での人命管理システムを想起させるものであるが、ミュラーの

場合はさらに言葉の多重性というテーマにも関わってくる。『キツネはそろそろもう猟師だった』では、髪や服の端切れが袋に詰められるというイメージがあらわれ、のちの作品『心獣』でもこれにそっくりな描写がある。しかしここで袋に詰められているのは髪や端切れではなく、言葉なのである。したがって、「増殖するもの」と言葉が同等のものとして扱われているということに着目しなければならない。

ミュラーが言葉を使って行おうとしていることは、言葉の多重性を制限せずに可能なかぎり描き出すことである。ある事物が、機能、所有者、そして経験した歴史などというあらゆる意味を獲得して作用しているのと同様に、言葉が指し示すものも一つにはとどまらない。また、ある対象を言葉で説明しようと試みたとして、対象が指し示すこと全てを網羅する言葉は存在しない。これはルーマニアで生まれ育ったドイツ語話者ミュラーの、一つの対象からドイツ語とルーマニア語双方を持つイメージを引き出すことが日常であったという二重言語体験に起因するものではあるが、一つの対象が幾重もの意味を内包することは、普遍的な現象である。ミュラー本人もエッセイの中で、対象である物とその名前が一致しないことへの違和感を抱えていたと説明している。そしてミュラーはその違和感を克服するために自ら新しい名前を創造するのである。つまり彼女は、こうした対象と言葉の関係について、対象と言葉双方が持つ意味をうまく合わせられないという事実甘んじ、説明しきれない意味を切り捨てようとはせずに、事物と言葉の双方を駆使して、増殖して広がっていく「意味」を制御せずに拾いだそうと試みているのである。対象と対象を組み合わせて、それぞれが本来持っていたイメージをそのままにしながらも新たな「何か」を作ろうとするミュラーのカラーージュ的描写方法は、こうした意識に起因しているのである。

第三章では、このような描写を生み出す観察の主体のパーソナリティ

と、物語に関する監視のイメージを結びつけて指摘した。『キツネはそのときもう獵師だった』は一人称小説が多いミュラーには珍しい三人称小説だというだけでなく、主人公とは別の立場にいる複数の登場人物に寄り添っているという点で他作品とは異なっている。しかしこの視点の多重化は、異なる立場の状況を映し出すことによって、支配者階級と被支配者階級それぞれの葛藤を明らかにするためのものというよりは、ただ単にどの立場に属していようとも、事物に脅かされるような非人間的な状況に在るのは同じであり、誰もがそのなかで不安に苛まれているという事実を浮き彫りにするものである。そしてこれらの「目」は錯覚を起こし、異質な物を組み合わせてグロテスクな情景を作り上げており、不安定な視線は、事物と人間を区別できないのである。

個人的な体験に基づくトラウマ的な状況が如何に表現し得るのか、戦後の作家たちはいつもこの問題に直面してきたといえる。そうした作家の一人であるミュラーの立ち位置として、最後の章ではテキストの断片性、そして沈黙と書く行為の關係についての彼女の言説を取り上げている。⁽²⁾ミュラーは単なる証言としてテキストを書いているわけではないことはつきりと表明すると同時に、トラウマ的な経験を語ってもそれが非現実的であると一蹴されてしまう事実⁽¹⁾に言及しており、そうしたことを人々は「語るべきでないこと」として沈黙してしまうと述べている。こうした沈黙されてしまう、非現実的なものとしてしか処理されえない出来事を物語に再現するものが、無言のまま多くを語ることができる、つまり沈黙しながら語りうる事物なのである。

注

(1) ロラン・バルト『モード論集』山田登世子編訳、筑摩書房、2011年、

(2) Herta Müller: Wenn wir schweigen, warden wir unangenehm - wenn wir reden, werden wir lächerlich, in: TEXT+KRITIK Nr.155 Herta Müller, Herausgeber: Heinz Luwig Arnold, München, 2002